

# 『源氏物語』 「いまめかし」 再考

—— 演出された美 ——

嶋 谷 惇 子  
吉 海 直 人

【要旨】 「いまめかし」という語は、プラスとマイナスの両義性を有する語である。そこで本稿では、「いまめかし」が使われている人物を中心に用例を検討してみた。

その結果、玉鬘・紫の上・中の君の「いまめかし」は、従来の研究では彼女たち自身のプラス表現とされてきたが、実は本人の資質ではなく源氏や匂宮によって外部から演出された美であることが判明した。さらに与える側の源氏にはマイナスの「いまめかし」が用いられており、それによって自ら演出した六条院世界が崩壊しているとも考えられる。

「いまめかし」という両義性を有する語は、決して単純な美的表現ではなく、『源氏物語』の世界を二重に演出する重要語

だったのである。

【キーワード】 源氏物語・いまめかし・演出

## 序、問題提起

私が「いまめかし」に注目した理由は、主人公光源氏に対して、

・ 「いまめかしくもなり返る御ありさまかな。昔を今に改め加へたまふほど、中空なる身のため苦しく」とて、

（新編全集・若菜上巻・85頁）

・「あなうたてや。いまめかしくなり返らせたまふめる御心  
ならひに、聞き知らぬやうなる御すさび言どもこそ時々出  
で来れ」とて、

(同125頁)

とマイナスの用例が二例も存するからである。若菜上巻において、紫の上と明石の君が期せずして源氏を非難しているのは、一体どのような意味があるのだろうか。

そう考えて他の「いまめかし」の用例を調べたところ、『源氏物語』の中で「いまめかし」が使われる人物を用例の多い順にあげると、玉鬘七例、源氏七例、匂宮五例、紫の上四例、夕霧三例、宇治中の君三例となる。ここで玉鬘に対する用例の多さが目に付いた。玉鬘は六条院に引き取られるまで長く筑紫で暮らしており、到底「いまめかし」が似つかわしい人物とは思えない。それにもかかわらず用例が多いのは、「いまめかし」によって誰かから演出されているとは考えられないだろうか。そこで本稿では、プラスの意味の「いまめかし」によって評価される人間である玉鬘・紫の上・宇治中の君、またマイナスの意味の「いまめかし」を与えられた源氏・夕霧や匂宮などを対象に、「いまめかし」の効果を再検討してみたい。

## 一、研究史展望

「いまめかし」についての研究は、古く犬塚巨氏をはじめとして、複数の研究者によって行われている。例えば犬塚氏は、「再び「今めかし」について」<sup>(1)</sup>において、

旧稿においてわたくしは新聞進一氏の説を批判しつつ考察をすすめ、「今めかし」が「花やか」「ゆゑあり」「好まし」「らう」「かど」などかよう面のあることを指摘し、しかもつねに「ふりがたく」なくてはならぬという時間的概念につらぬかれているところにその特色があるとした。

と書かれている。犬塚氏は「今めかし考」で「いまめかし」の周辺語句との関わり方を中心に論じられ、続く「再び「今めかし」について」では対象人物を検討しながら、「華麗」を意味する言葉との相違から、「いまめかし」の意味性格を検討しておられるのである。しかしながらそこで、

「今めかし」こそが、他の追隨をゆるさぬまでとくに個人的に玉鬘なる人物をつよく支えていることを思うのである。

源氏作者がこうした玉鬘をしばしば「めでたし」と評し、源氏・頭中将をして上述のごとく激賞させていることは、

ひいて「今めかし」の高い価値性を助証するものといえな  
いであろうか。

と言われている点がかかる。果たして玉鬘の「いまめかし」  
は、本当に玉鬘自身の美質なのであるか。

河添房江氏も同様に、玉鬘十帖における「いまめかし」につ  
いて取り上げられ、それが六条院世界を覆う新しい美意識の露  
頭ではないかとされている。玉鬘十帖あるいは玉鬘自身に「い  
まめかし」の用例数が多いことは事実である。その点から「い  
まめかし」を玉鬘の特徴とすることは頷けるのであるが、しか  
し玉鬘の生い立ちなどを踏まえた上で検討し直すと、単純に  
「いまめかし」を玉鬘の特徴とすること、また六条院世界を玉  
鬘の登場による「いまめかし」とすることには疑問が生じて  
くる。

目に入りやすいのは、プラス評価の「いまめかし」である。  
もちろん『源氏物語』における「いまめかし」の用例は、マイ  
ナス評価よりもプラス評価の方が圧倒的に多い。しかし、皮肉  
などの感情が込められたマイナス評価をも用いることで、物語  
としての面白さがより一層引き立っていることに注目し、その  
あたりの仕組みを究明したい。

『源氏物語』「いまめかし」再考

ところで「いまめかし」は、『日本国語大辞典』（小学館）に  
は次のように掲載されている。

①当世風でりっぱだ。目新しくすぐれている。気がきいて  
しゃれている。現代風で若々しい。

②現代風で、はなやかである。にぎわわし。陽気である。

③現代風で軽薄である。はなやか過ぎて感心しない。きざっ  
ばい。

④いまさらめいている。わざとらしい。改まっていて変であ  
る。

このうちの④は、鎌倉時代以降に見られる意味なので本稿で  
は省く。要するに「いまめかし」は、①②のようなプラスの意  
味と、③のようなマイナスの意味両方を持ち合わせていること  
になる。『源氏物語』には「いまめかし」七十九例、「いまめか  
しげなり」一例、「いまめかしさ」一例、「いまめく」二十四例  
が使われている。これらの用例は、辞書の意味をそのまま単純  
に当てはめてよいものも少なくないが、『源氏物語』では他作  
品に比べて「いまめかし」という語が人物・場面・物事を表す  
のに効果的に使われているように感じる。

## 二、女性の用例

まず、プラス評価を与えられた玉鬘・紫の上・中の君の三人について検討してみたい。

### a 玉鬘

玉鬘に関する「いまめかし」の用例は、これまでの研究でも指摘されている通り、<sup>(2)</sup>他の人物に比べると圧倒的に多い。その初出は、

撫子の細長に、このごろの花の色なる御小桂、あはひけ近ういまめきて、もてなしなども、さはいへど、田舎びたまへりしなごりこそ、ただありにおほどかなる方にのみは見えたまひけれ、人のありさまを見知りたまふまに、いとさまよう、なよびかに、化粧なども心してもてつけたまへれば、いとど飽かぬところなく、はなやかにうつくしげなり。  
(胡蝶巻178頁)

である。ここで田舎っばさが抜けてきたように語られた後、しばしば付与される「いまめかし」表現のほとんどはプラス評価であった。それは本当に玉鬘自身の「いまめかし」さなのであ

ろうか。

前述の河添氏は、

「いまめかし」は、年中行事や六条院の構成原理ばかりか、玉鬘十帖のかなめとなる女君ヒロイン玉鬘の性格や、その人が習熟に熟意をこめした和琴の音などをつらぬく基調となっている。すなわち、六条院流ともいふべき「今めかし」さの基調に、玉鬘という女君はぴったりと寄りそう存在なのであった。

<sup>(3)</sup>と述べられている。さらにその後で、玉鬘の「いまめかし」さは父内大臣の性格に負うもの、また玉鬘は光源氏世界の基調にも新風をふきこむ存在と述べられている。だが本当にそう言い切れるのであろうか。本文を慎重に検討してみると、玉鬘が六条院に来た直後の記述に、

御しつらひよりはじめ、今めかしう気高くて、親兄弟と睦びきこえたまふ御さま容貌よりはじめ、目もあやにおぼゆるに、今ぞ三条も大式を侮らはしく思ひける。  
(玉鬘巻133頁)

とあって、筑紫から来た人々は六条院の様子を「いまめかし」と感じている。この例から、玉鬘が登場する以前の六条院が、

既に「いまめかし」い場所であったことが窺える。

では玉鬘自身は「いまめかし」だったのであろうか。玉鬘が六条院に「いまめかし」という新風を吹き込んだのであれば、それは玉鬘自身が「いまめかし」かつたからである。しかし河添氏も分析しておられるように、玉鬘は夕顔の死後に西の京の乳母に連れられて筑紫で幼少の頃を過ごしたのであるから、都の雅な生活つまり「今風」な生活とはかけ離れて育つたはずである。たとえ乳母とその家族が、亡き夕顔の忘れ形見として大切に育てたとしても、田舎の生活では限界があるはずだ。六条院に入る以前の玉鬘に「いまめかし」の用例がないことから、玉鬘の「いまめかし」さが本来のものでないことは容易に察せられる。つまり「いまめかし」い世界を知らないはずの玉鬘が、たとえ父内大臣の血筋を引くことでそういった資質を備えていたとしても、六条院世界に「いまめかし」を持ち込むことは不可能なのである。

それにもかかわらず、玉鬘は何故「いまめかし」い女性として描かれているのであろうか。私はそこに光源氏の積極的な関与（演出）を考えたい。その証拠に玉鬘の「いまめかし」さは、  
・ 対の御方よりも、童べなど物見に渡り来て、廊の戸口に御

簾青やかに懸けわたして、いまめきたる裾濃の御几帳ども立てわたし、童、下仕などさまよふ。  
(蜚巻206頁)

・ やむごとなくまじらひ馴れたまへる御方々よりも、この御局の袖口、おほかたのけはひいまめかしう、同じものの色あひ重なりなれど、ものよりことにはなやかなり。

(真木柱巻383頁)

などとあるように、直接玉鬘の人柄を表すものではない。これらは几帳・袖口などであり、玉鬘に纏わるものは、源氏によって容易に仕立てることのできるものである（胡蝶巻の装束も同様）。人物の内面は簡単に変えられるものではないが、外面に關しては、本人の意思はどうであれ、その人物を掌握している者によって飾り付けができるのである。つまり玉鬘の「いまめかし」さは玉鬘自身の資質という以上に、源氏が付与・演出したものであったのではないだろうか。

#### b 紫の上

次に紫の上の「いまめかし」であるが、若紫巻で源氏と共に、御遊びがたきの童べ、児ども、いとめづらかにいまめかしき御ありあさまどもなれば、思ふことなく遊びあへり。

と表現されて以降、

(若紫卷261頁)

・親もなくて生ひ出でたまひしかば、まばゆき色にはあらで、  
紅、紫、山吹の地のかぎり織れる御小桂などを着たまへる  
さま、いみじういまめかしうをかしげなり。

(紅葉賀卷320頁)

・対の上の御は、三種ある中に、梅花はなやかにいまめかし  
う、すこしはやき心しらひを添へて、めづらしき薫り加は  
れり。

(梅枝卷409頁)

・あるべき限り気高う恥づかしげにととのひたるにそひて、  
はなやかにいまめかしくにほひ、なまめきたるさまさまの  
かをりも取りあつめ、めでたき盛りに見えたまふ。

(若菜上卷89頁)

・和琴に、大将も耳とどめたまへるに、なつかしく愛敬づき  
たる御爪音に、掻き返したる音のめづらしくいまめきて、  
さらに、このわざとある上手どもの、おどろおどろしく掻  
きたてたる調べ調子に劣らずにぎははしく、

(若菜下卷190頁)

と、五例すべてがプラス評価として使われている。こういった

紫の上の例も玉鬘同様、源氏に引き取られてからの用例である  
こと、また内面を指す「いまめかし」さではなかったことがわ  
かる。唯一、若菜上巻の用例は内面的なものと言えなくもない  
が、この文は源氏の心情描写であって、源氏の納得のいく「い  
まめかし」さが紫の上に備わったということである。このよう  
に紫の上の「いまめかし」も、玉鬘同様に源氏に仕立てられた  
ものだったと言える。

#### c 宇治中の君

中の君に関する用例は三例あるが、彼女に対する用いられた  
も全てプラス評価である。

すべていと思ふことなげにめでたければ、御みづからも、  
月ごろ、もの思はしく心地のなやましきにつけても、心細  
く思しわたりつるに、かく面だたくいまめかしきことど  
もの多かれば、すこし慰みもやしたまふらむ。

(宿木卷474頁)

一つだけ注目すべきことは、中の君が宇治に住んでいた時に  
は、一度も「いまめかし」の用例が用いられていないというこ  
とである。もちろん宇治という場所が「いまめかし」に似つか

わしくないわけだし、実際に宇治では中の君に限らず「いまめかし」の用例はまったく見られない。それまで「いまめかし」  
くなかつた中の君が、急に「いまめかし」くなっているの  
である。これは前述した玉鬘や紫の上と同様、中の君から醸し出さ  
れる内面的な「いまめかし」さではなく、宇治から都へと移り  
住んだことで、匂宮から新たに中の君に付与されたものと考え  
たい。

この三人の用例を考察した結果、すべてプラス評価で使われ  
ていることがわかつた。その「いまめかし」さは、表面的には  
本人の美質と捉えてしまいそうであるが、実際には源氏や匂宮  
がそれぞれの女性に付与し、「いまめかし」く演出したものだ  
たと考えたい。

### 三、男性の用例

今度は、マイナスの評価を与えられている男性三人、源氏・  
匂宮・夕霧について検討してみたい。

d 源氏

藤裏葉巻で源氏は准太上天皇という地位を与えられる。さら

『源氏物語』「いまめかし」再考

に明石の姫君の入内、夕霧と雲居の雁の結婚、巻末では今上帝  
と朱雀院の行幸と、華々しい出来事が記述されており、源氏一  
族が栄華を極めたことが物語られている。しかし、次の若菜上  
巻において女三の宮が六条院に降嫁したあたりから、源氏自身  
の栄光は徐々に崩れてきているように思われる。ここで最初に  
あげた「いまめかし」の二例をあらためて検討してみたい。

・「いまめかしくもなり返る御ありさまかな。昔を今に改め  
加へたまふほど、中空なる身のため苦しく」とて、

(若菜上巻85頁)

・「あなうたてや。いまめかしくなり返らせたまふめる御心  
ならひに、聞き知らぬやうなる御すさび言どもこそ時々出  
で来れ」とて、

(若菜上巻125頁)

前の用例は朱雀院の出家後に朧月夜と逢ってきた源氏に対し  
て紫の上が、後は女三の宮との結婚を下に含んだ表現として明  
石の君が源氏に、それぞれ皮肉を込めて口にした言葉である。  
源氏に用いられる「いまめかし」は、七例中三例がマイナス評  
価であった。本来「いまめかし」という語は今風が似合う、つ  
まり若い年齢の人物に使われるべき語ではないだろうか。それ  
を若菜上巻のように、ある程度年を重ねた源氏に使用すること

には、批判的な側面が感じられる。

前述のように、源氏は六条院における「いまめかし」の演出家であった。その源氏がここで自ら「いまめかし」仕立て上げた紫の上から、マイナスの「いまめかし」で逆に評価されているのである。そこに「いまめかし」の危うさがあった。本来完璧であるはずの主人公源氏が、「いまめかし」というプラス・マイナス両義を持ち合わせる語によって、あえて両面から描かれていることに留意しておきたい。

e 匂宮

匂宮も源氏同様、「いまめかし」がマイナス評価で使われることの多い人物である。五例中三例がマイナス評価であり、派手好きな性格に描かれているという印象は拭えない。マイナス評価の例としては、

風涼しく、おほかたの空をかききころなるに、いまめかしきにすすみたまへる御心なれば、いとどしく艶なるに、もの思はしき人の御心の中は、よろづに忍びがたきことのみぞ多かりける。  
(宿木卷412頁)

という一文がある。これは匂宮が夕霧六の君と結婚した後のも

のであり、「もの思はしき人」とは宇治の中の君のことである。ここでは匂宮をマイナスの「いまめかし」と批判することによって、中の君の心情が浮き彫りになっている。

匂宮の年齢において、「いまめかし」は決して似つかわしくないものではない。また匂宮の性格も派手好きで、どちらかといえばマイナスに近い「いまめかし」が使われたとしても違和感はない。それらの点においては源氏の「いまめかし」とは異なっているが、それにしても前に中の君の用例で検討したように、匂宮も「いまめかし」の演出家であるという点で、源氏との共通性が見出せる。

f 夕霧

最後に、夕霧に使われる「いまめかし」は、  
・「なやましげにこそ見ゆれ。いまめかしき御ありさまのほどにあくがれたまうて、夜深き御月めでに、格子も上げられたれば、例の物の怪の入り来たるなめり」  
(横笛卷360頁)

・「もののはえばえしき作り出でたまふほど、古りぬる人苦しや。いといまめかしくなり変れる御気色のすさまじさも、

見ならばなりにけることなれば、いとむ苦しき。かねてよりならばしたまはで」  
(夕霧巻429頁)

と雲居の雁から発せられる二例と、蜻蛉巻で夕霧一族を指す例の計三例である。ここに挙げた二例が、どちらもマイナス評価であることに注目したい。そもそも夕霧という人物は、どちらかといえば実直な「まめ人」として描かれており、「いまめかし」という言葉、しかもそのマイナスの意味を用いられるのは似つかわしくないと考えられないだろうか。その夕霧にあえてマイナスの「いまめかし」を使うことは、どのような効果をもたらししているのであろうか。

ここで前述の源氏に使われた「なりかへる」を思い出していただきたい。夕霧に使われている「いまめかしくなり変る」は、その例に類似していることがわかる。この「いまめかし」、年甲斐もなく落葉の宮に懸想する夕霧に対し、雲居の雁が皮肉を込めて口にしたものである。つまり雲居の雁は、夕霧が「いまめかし」くなることを望んではいなかったのである。もちろん雲居の雁は紫の上や明石の君の言葉を聞いているはずはないので、雲居の雁にとっての「いまめかし」は、それを踏まえての発言ではない。しかしここで源氏に類似した「いまめかし」を

用いることによって、作者は読者に若菜上巻の例を想起させ、源氏と夕霧の見えざる親子関係(繰り返し)を強調しているのではないだろうか。読者の立場から考えると、夕霧はそれまで源氏とはあまり似ていない性格の持ち主という印象を受けていた。しかし夕霧は間違いなく源氏の子なのであり、その性格が受け継がれた部分こそがこの「いまめかし」なのである。

この三人に共通して言えることは、マイナスの「いまめかし」を与えられたということと、三人とも他の女性を演出しているということである。源氏・匂宮については先に述べた通りであるが、夕霧もまた娘六の君の演出家になっている。匂宮と結婚させた六の君は、

わざとはなくて、この人々に見せそめてば、かならず心とどめたまひてん、人のありさまを知る人は、ここにこそあるべけれ、など思して、いといつくしくはもてなしたまはず、いまめかしくをかしきやうにも好みさせて、人の心つけんたより多くつくりなしたまふ。  
(匂宮巻32頁)

とあるように、夕霧によって「いまめかし」く養育されていたのである。

このようにマイナスの「いまめかし」を与えられた三人は、

同じように「いまめかし」の演出家ともなっていたことが明らかにになった。

### 結、「いまめかし」の再評価

以上、『源氏物語』における「いまめかし」について、人物ごとの用例を再検討してきた。玉鬘・紫の上・中の君は、「いまめかし」さの設定において非常に類似している。と言うのもこの三人の「いまめかし」さは、本人の内面から生まれているものではないからである。これまでの研究では、玉鬘の用例の多さとそのヒロイン性から、「いまめかし」と玉鬘がびたりと寄り添う存在として論じられてきた。

しかし重要なのは玉鬘に「いまめかし」の用例数が多いことではなく、その玉鬘の「いまめかし」さが源氏によって演出されているという点である。「いまめかし」さを単純に、玉鬘自身的美質とすることは、その点についての考察が不十分だったのではないだろうか。紫の上に関しても同じことが言える。この二人は、共に源氏によって「いまめかし」く作り上げられていただけなのである。私は「いまめかし」論の新しい視点として、それが演出・飾り付け可能な外面的なものであること、

そしてそのコーディネーターが存在しうることをここで提示したい。<sup>⑥</sup>

源氏は造宮した六条院を、他の人々に「いまめかし」く見せなかった。そのために六条院世界は、「いまめかし」さを必要としていたのである。源氏の目論見は、紫の上を自分の思うように育て上げ、さらに玉鬘をそこに加えたことによって見事に成功した。しかしそれは所詮外面の演出であって、内実まで「いまめかし」という美意識を作ることには成功しているとは言えない。それこそが「いまめかし」の危うい美なのである。

加えて若菜上巻以前の源氏は、「いまめかし」を演出する側の人間であった。しかし若菜上巻においては、逆に「いまめかし」によって評価される側の人間になっている。紫の上や明石の君は、源氏によって造宮された「いまめかし」き六条院世界で暮らす人物であった。その紫の上から源氏はマイナスの「いまめかし」で評価されているのである。源氏と敵対している人間がこのような批判を行うのであれば何の問題もないが、最大の味方・理解者であるはずの紫の上や明石の君がマイナスの「いまめかし」を口にすることで、源氏の演出によって理想化されてきた六条院世界は、内側から崩されてしまうことになる。

この二重構造は夕霧と雲居の雁、匂宮と中の君にも継承されていた。夕霧の場合はさらに類似表現を用いることによって、源氏との親子関係までも想起させられていた。匂宮と中の君については、六条院世界の「いまめかし」と同じようには論じられないが、中の君には玉鬘や紫の上の状況がほぼ当てはまる。宇治という場では決して「いまめかし」くなかった中の君が、匂宮との結婚により「いまめかし」く作り上げられたからである。

六条院世界における「いまめかし」さの演出は、源氏にとっては完璧にプロデュースできたと思えるものであったかもしれない。しかしプロデューサーであった源氏が、自分が仕立て上げたはずの「いまめかし」き女性達からマイナスイメージをなされたしまった時、私は物語の世界を演出しているのが作者であることを再確認することになった。

〔注〕

(1) 『源氏物語』の「いまめかし」に関する主要論文としては、以下のようなものがある。新間進一氏「栄華物語の「今めかし」に就いて」国語と国文学23—12・昭和二十一年十二月、犬塚

『源氏物語』「いまめかし」再考

日氏「今めかし」考」「再び「今めかし」について」「王朝美的語詞の研究」笠間書院・昭和四十八年九月、河添房江氏「六条院王権の聖性の維持をめぐる——玉鬘十帖の年中行事と「いまめかし」——」『源氏物語の喩と王権』有精堂・平成四年十一月、助川幸逸郎氏「今めかし」という方法——光源氏世界の栄華と衰頹をめぐる——」『源氏物語の視界四』新典社・平成九年五月、池田節子氏「いまめかし」考——玉鬘十帖の光源氏——」『源氏物語表現論』風間書房・平成十二年十二月、内藤聡子氏「源氏物語」における「いまめかし」について」愛知大学国文学三六・平成八年三月。

(2) 注1の犬塚氏、助川氏の論文において、玉鬘の用例の多さが指摘されている。

(3) 注1の河添氏の論文より引用した。それに対して池田氏は光源氏を「いまめかし」くない人物とされている。

(4) 内大臣に対して「いまめかし」の用例は二例あり、また絵合巻においてはその娘弘徽殿側が「いまめかし」とされていることから、河添氏の言われるように、血縁関係にある玉鬘が内大臣の「いまめかし」さを継承することは可能ではある。

(5) 『源氏物語大成』（中央公論社）を調べると、「いまめかし」くになり変れる御気色のすさまじさも」の部分は「いまめかしさも」本文となっていた。しかし、源氏と夕霧の類似という観点から「なり変る」を伴うほうが読者へのインパクトを与えられ

『源氏物語』「いまめかし」再考

るはずである。したがって『新編日本古典文学全集』（小学館）の本文を採用した。

- (6) そうなると、玉鬘巻の「衣配り」についても、同様の視点から再検討しなければならなくなる。

\*本稿は二〇〇五年度に提出された嶋谷さんの卒業論文を、吉海が私に三十枚論文に短縮・加工したものである。嶋谷さんは「いまめかし」に関して、従来の研究があまりにも単純に美的表現と理解していることに対して、それが男性側の演出であることを見抜き、さらに演出した男性達が、逆にマイナスの「いまめかし」によって批判されていることを実証的に論じており、非常にレベルの高い卒業論文であった。この成果をこのままにしておくのはもったいないので、枚数を絞って学内誌に発表させていただく次第である。その過程で、反対語「ふるめかし」に関する考察一章分を全て削除していることをお断りしておきたい。